

---

# モンスターハンター～偽者の剣～

オヒテノー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モンスターハンター〜偽者の剣〜

### 【Nコード】

N6440Z

### 【作者名】

オヒテノー

### 【あらすじ】

初投稿です。投稿主は才能なんざ皆無な中で書いております。お許しを。あらすじはひょんなことからハンターになってしまったある男の子ががんばっているいろいろなモンスターを狩っていく話です。ここ、おかしんじゃない？といった所はドンドン教えてください。また、感想なんかもらえちゃうととても嬉しいです。批判でも嬉しいです。

## プロローグ？（前書き）

よろしくお願いします！

## プロローグ？

PM5時35分

凍土にて

(・・・はぁ・・・疲れた・・・寒い・・・)

凍えきつた凍土で大きめの重いリュックを背負っているとある旅の商人はゲンナリしながらそう思った。

商人の名前は『ミライ』。

彼は今からユクモ村に行く予定だった。

(でも次に行くユクモ村ってところは確か温泉が名物だって聞いたことがあるから、あつまってから次の村に行こうかな)

と、呑気な事を考えながら歩いていると横からモンスター怪物の鳴き声が聞こえた。

彼は右の方を向いて少し考えると、

(この鳴き声はきつと『バギィ』だな。アイツらの吐き出す液はとて眠くなるんだよな。 さっさと逃げよう)

そう思つて前を向いたミライだったが目の前には例の『バギィ』がいた。

「チクシヨウ!! もういやがるじゃねえかよ!!」

ミライは驚きつつも、全力で『バギィ』から逃げ出した。

しかし彼の荷物はとても重く、はつきり言つて絶望的なスピードで走っている。

そんなミライに『バギイ』が負けるわけがなくすぐに追いつかれ全体重をのせた体当たりが彼の背中にヒットした。

「うおっ！」

幸い体当たりはミライ本人ではなく彼のリュックに当たった。

しかし当然彼はバランスを崩してこけてしまった。

「ぐぼっ・・・おっ俺はおいしくなんかないぞ!！」

半ば投げやりになりながら起き上がり、後ろに後ずさるミライ。

とその後ろから足音がした。

「・・・おい!その足音のやつ!それ以上こっちに来るな!」

しかし足音はどんどん大きくなっていく。

「なにやってんだよ!聞こえねえのか!早く戻れって!ここにはモンスターがいるんだよ!」

そしてその足音の張本人が姿をあらわした。<sup>ハンター</sup>

そのハンターは素早い動きで彼の背中に装備されている双剣を取り出し今すぐにでもミライを食べんとする『バギイ』の首を簡単に切り裂いた。

「・・・なんだあんたハンターだったのか・・・たっ・・・助かった」

とてつもなくマヌケな声を発するミライにハンターは双剣をしまいながら、

「君！ケガはないね！」

そう聞かれてミライは、

「ありがとうございます。大丈夫です。」

と答えた。

ここでミライがハンターに対して敬語だったのは、べつにミライの頭がおかしい訳ではなく、単にハンターという職業がみんなの憧れであり、ヒーローのようなものだからだ。

この世界ではハンターがいるだけでほとんどの事が解決してしまう、そんな世界よのなかなのだ。

そして今回もそのハンターに解決してもらったというだけのはなしだ。

しかしまだミライは知らない、これからおこる惨劇に。

## ブローグ？（後書き）

全体的にグダグダです。

多分これからつじつまが合わなくなることもあるでしょう。

そっとしておいてあげてください。

自己満足なんです。

プロローグ？（前書き）

2話目も連続で投稿します。



## プロローグ？

pm 4時23分

凍土（ユクモ村付近）にて

偶然助けてもらったハンターと話していくとミライとハンターとの間には共通点があった。

それはこれからの行き先だ。

ミライはこれからユクモ村へ行くのだが、奇遇なことにハンターの方もこれからユクモ村へ行くそうだ。

そういったことから2人は一緒にユクモ村へ行くことになった。

歩きながら聞くハンターの話はとても素晴らしかった。

狩猟先で砥石を忘れて必死で狩猟エリアを駆けずり回つという話には爆笑だったし。仲間が死んでしまったという話をきいたときにはすごく悲しい気持ちになれた。

そしてミライもハンターに旅をしている時の感動的な話をしていると不意にハンターが立ち止まり、とても悲しそうな顔で笑っていた。どうしたのだろう。

と、思っていたがそんな顔もすぐに消え、もとの笑顔に戻った。

なんかマズイ事言っちゃったかな？と思っていたミライだったが、そんなことはすぐに忘れまた話だした。

そしてしゃべり疲れた2人がとても寒かったのでホットドリンクを飲んでみると、ついにソレは現れた。

ソレはふぎけたようなバカデカイ声を発しながら2人に近づいてきた。

『イビルジョー恐暴竜』、それは出会ってしまったたら即撤退が鉄則のモンスター。  
そんなモンスターが現れてしまったのだ。

「なっ・・・なんなんだ。このモンスターは・・・」

ついミライがつぶやいている中、ハンターは諦めたようなため息を吐いた後おもむろに彼の背中にある双剣を引きぬいて、

「早くその重い荷物を捨てて逃げろ！！その荷物とお前の命どっちが大切だ！！」

と急に大きな声を出した。

急に言われてビックリしたミライは、言われるがままリュックを降ろした。

・・・とここでミライは一つ気がついた。  
きつとこのハンターはこの『バケモンイビルジョー』に勝つことができない。  
しかし自分を逃すためにあえて勝てない相手と戦おうとしているのではないかと。

しかし、ハンターは何でもないように。

「大丈夫！なんとかなるさ！」

と、言っているが『イビルジョー』はヨダレをダラダラ垂らしつつ今にも襲いかかりそうだ。

「絶対に追いつく！だから早く行け！」

そっぴいながら片っぱの剣を『イビルジョー』に投げた。その剣は見事にイビルジョーの片目に当たった。ハンターってスゲー。

『イビルジョー』の雄たけびが凍土にこだまする。

「絶対に追いついて来いよ!!」

そう言いながら全力で逃げ出すミライ。

ハンターの姿が見えなくなる。

ハンターのものであろう絶叫が響き渡る。

・・・どれだけ走ったのだろうか。

もう足の感覚がなくなっていた。

小高い山の頂上でミライは足を止めた。

意識がもろろつとしている。

「やっ・・・・・・・・やべー・・・・・・・・」

ホットドリンクを飲んでいるので凍え死ぬことは無いだろうが、モンスターに襲われそうで怖い。

村までもう少しだ・・・そう思ったとき不意に足がもつれた。

やばい。ここでこけてしまったらマジで死ぬ。

しかしミライはそのままこけて山を転がるように落ちてしまった。

ミライの視界が狭くなっていく。

そしてついにミライの意識が断絶した。

「良かった！目を覚ましたんですね！」

そんなこうるさい声が聞こえる・・・

すごい暖かい。そうかここは天国なんだなーとミライが超適当な事を思っていると、

「すみません！早速で悪いんですけど、クエストがたまっているんです！」

・・・は？どういう事？

「ちよつ、・・・え？」

ミライが混乱していると、

「さあ、ハンターさん、がんばっていきましょーっ！」

ここは天国ではなくユクモ村である。

そしてミライはハンターになってしまっていた。

プロローグ？（後書き）

どうでしたか？  
感想待ってます。

## 第一話（前書き）

ドスジャギイ編です。多分すぐに終わると思います。

## 第一話

「……ハンターになってしまった……」

ミライはついつぶやいてしまった。

どうやらユクモ村ゆくもむらの人はミライの事を凍土から来たハンターだと思っ  
っている。

「……違う……きっと俺は旅商人だったはずだ」

でもどうしようか。考えてみよう。

正直に話してみる？

そんなこと言ってもだれも信じてくれないだろう。

逃げる？

でも逃げ出したらなんか後味が悪い。

しかもなんにも持ってないし。絶対飢えて死ぬ。

しょうがない、頑張ってみるか。

「とりあえずそれっぽく見えるように防具を着てみるか」

そう思いミライは近くにあった大きめの青いボックスのような物を  
開けてみた。

中に入っていたのは……ユクモ村の工芸品だろうか、大きな笠や、  
袴などが入っていた。ありがたい。

早速着てみると怖いぐらいぴったりだった。

そして武器の方も見てみたが、こちらも、工芸品のような少し古び  
たものが数種類あった。

「まあ、あの人は双剣ハンターを使ってたからな……双剣にするか」

または本者のハンターが万が一ユクモ村に来た時に辻褃が合うように・・・ね。

そしてミライが双剣を背中に装備し、先程の女の子のところに行く  
と、彼女は甲高い声で、

「やっと起き上がりましたね！！ さあ、早速クエストを受注してください！！！」

「つつてもなんかお勧めのクエストとかないの？」

「そうですね。最近はこの村の近くにある渓流で、『ドスジャギイ』が現れて周りの家畜などを襲っていて被害がすごいですね」

「じゃあそいつを早いとこそいつを倒さないとヤバイんじゃないのか？」

「はい」

「そうか、じゃあそのクエストをやるよ」

「わかりました。でもハンターさん回復薬とか何も持ってないですけど大丈夫ですか？」

「ん〜でもお金を全く持ってないからな・・・」

「じゃあ私がお金を貸しますよ！！貸したお金はこのクエストの達成金でかえしてくればそれでいいです！！！」

「そう？じゃあありがたく」



そしてある程度のお金を貸してもらったミライは道具屋に行ってみると、

「うん？君、見ない顔だね。どうしたの？」

男の人にいきなり大きな声で話しかけられた。こっちは何も喋っていないのに。

「どうしたんだい？何か買いたいのだろう？」

「あっ、はい」

そしてミライは回復薬や砥石などを購入した。

こうしてみると本当にハンターみたいだ。

そりゃあ男の子なら一度は夢見る職業だもんな。

・・・よし大丈夫そうだ。行こう。

とここで疑問が生じた。

「どうやって渓流に行くんだ？」

考えてみればそうだった。どうだろう。歩くのだろうか？・・・はあしかし女の子はそれを否定して、

「なに言ってるんですか？ガーグアに乗って行くんですよ」

そうかこの辺りの主な交通手段はガーグアだったっけ。

「ありがとう。行ってくるよ」

「はい！行つてらっしゃい」

そんな明るいくエスト嬢の声を聞きながら、ミライはガーグアの後ろの荷台に乗った。

ガーグアが動き始める。

あまり心地よいとはいえない乗り心地だが、我慢するしかない。

でも実は結構嬉しい。昔の夢がなかったから。

確かにモンスターは怖いけど。まあいつも重い荷物持ってたから体力も人並み以上にはあるはずだし。

「うーん、まあなんとかなるかな」

相変わらず呑気なミライだった。

## 第一話（後書き）

ドスジャギイ編とか言っておきながらドスジャギイが話の中にほとんどないですね。きっと次ぐらいには出てきてくれることでしょう。

## 第二話（前書き）

前回は、さあ『ドスジャギイ』に挑戦だ！という感じでしたが・・・

## 第二話

クエストが始まった。

ミライは事前に村で買っていた地図を広げた。

「うーん、ここがユクモ村だからこの場所はだいたいこちら辺かな」  
まずは自分の居場所を突き止めなければ始まらない。

今の場所がわからないまま突っ込んでも、迷子になってモンスターの討伐どころではなくなってしまう。

そして周りを少し歩くとすぐに自分の場所がわかった。

もともと地図を読むのは得意なのだ。

「これくらい出来なきゃ行商人なんてやっていけないしな」

ミライは暫定的にいくつかの場所に数字を振った。

こうしておく事でいくらか地図が分かりやすくなるからだ。

「よし、まあとりあえず手当り次第まわってみるか」

今回の討伐対象は『ドスジャギイ』という『ジャギイ』や『ジャギイノス』などの親玉のような奴らしい。

また、『ドスジャギイ』はその他のモンスターよりも一回り大きいそうだ。

そして一番の見分け方は顔のところについている大きなエリマキのようないだひだだ。

これは直接写真を見せてもらったからわかる。

数分歩き回っていると、『ジャギイノス』を三匹見つけた。とりあえず肩慣らしにこいつらをやつつけようと思い、ミライが双剣を背中から抜くと、『ジャギイノス』がミライの気配に気づき、ミライの方を向き叫び声をあげた。

覚悟を決め『ジャギイノス』に斬りかかるミライ。

「うおおおおおおお!!!!」

ミライの攻撃は当たった。しかしあまり『ジャギイノス』にダメージは与えられていないようだった。

しかし幸いにもこの双剣という武器の種類は全体的に軽い武器だったのでミライはそのまま次の攻撃に移ることができた。

三回、四回と攻撃を当てていくとブチっという小気味の良い音が聞こえて『ジャギイノス』のうちの一匹が倒れたまま動かなくなった。そしてそれを確認したミライは残りの二匹にむかっていった。

ようやくすべての『ジャギイノス』をミライは倒した。

「はあはあ……はあはあ」

一匹目は意表を突いて倒したが、二匹目からは『ジャギイノス』達も慎重に襲ってきた。

そしてやっとのことで三匹目の『ジャギイノス』の息の根を止めることができたのだ。

「……疲れた……」

しかしまだ『討伐対象』ドスジャギイを倒すどころか出会ってすらいないので、ミライは双剣をしまつてまた歩き始めた。

数十分エリア内を歩きまわった。

その結果『ジャギイ』たちの巢のようなところを見つけた。そしてやつのことで『ドスジャギイ』を見つけた・・・

「ったくも〜。どんだけ遠くにいるんだよお〜」

しかしだいが探しまわったので疲れたが、結構沢山のモンスターも倒したし、自信もついた。

「さぁーとつととやっつけるか!」

『ドスジャギイ』がこちらに気づいた。叫び声をあげる。やはり親玉は雰囲気が違う。睨まれるだけで気圧されそうだ。

しかしそんなものに負けてはいられない。

ミライは双剣を背中から引き抜いて『ドスジャギイ』にむかって駆け出した。

こいつさえ倒せば村に帰れる。

そう、こいつさえ。

## 第二話（後書き）

すみません。今回も『ドスジャギイ』が全然出てきていません。  
でも次こそは絶対出します。  
頑張ります。



### 第三話（前書き）

皆さんあけましておめでとうございます…！  
今年も頑張ってください。  
よろしくお願ひします。

## 第三話

大きな声で叫んで突撃していったミライだが内心めちゃくちゃ緊張していた。

(やべえ!!超怖え!!! しかもこんな奴本当に倒せるのか?)

そんなことを考えていたミライに『ドスジャギイ』が接近してきた。そしていきなり噛みついてきた。

・・・もろにヒット。

「うつ、うがつ!!・・・げほっ」

今までのモンスターたちの攻撃はだいたい防具のおかげであまりダメージを受けることは無かったのだが、ここはやはり『ドスジャギイ』攻撃が重い。

とりあえず距離をあげ、回復薬を使うミライ。これでいくらかはマシになる。

『ドスジャギイ』はミライに再び噛みつこうと距離を詰めてくる。

しかしミライも同じ攻撃を何度も当たってあげるほどお人よしではない。

『ドスジャギイ』が噛みつく為に顔をあげた瞬間ミライは『ドスジャギイ』の正面から側面にまわりこみ、両手の剣で斬りつけた。

うめき声をあげる『ドスジャギイ』。ミライはそのまま連続で斬りつけた。

しかしそこまでだった。急に『ドスジャギイ』が後ろにさがり、叫び始めたのだった。

「なんだ？急に叫びだして」

するとそこらじゅうの穴からたくさんの『ジャギイ』や、『ジャギイノス』が現れた。それぞれ八匹くらい。

「ふっ・・・ふざけんなっ！！　こんなにたくさん相手にできるかっ！！」

そして『ドスジャギイ』が攻撃命令をだした。

すべてのモンスターたちがいつきにミライを睨みつけた。

32もの鋭い眼光がミライに襲いかかる

そして次の瞬間ミライにむかってたくさんのモンスターが噛みついてきた。

必死に応戦するミライ。しかし数の利は相手にある。あっという間に端っこの方に追い詰められてしまった。

「くっそっ！！せこいぞ！！・・・っと、危ねえ！」

『ジャギイノス』の噛みつきを回避して逆に斬りつけるミライ。

そうしてたくさんを相手を相手どる。

しかし結局すべてのモンスターを倒した時には、もう『ドスジャギイ』はそこにはいなかった。

だが、『ドスジャギイ』は隣のエリアに移動していただけだった。

しかももう『ドスジャギイ』には子分たちはいないようで、これ以上仲間を呼ぶことはなかった。

「よっしゃ！もう何もこないみたいだな！！」

この機会をチャンスとみたミライは、全力で『ドスジャギイ』を連続で斬りつけた。斬りつけまくった。

そしてついに『ドスジャギィ』の体が宙をまい、やがて地面に叩きつけられた。

「やった！」

両手をあげて喜んでいるミライだったが、しかしそれが災いした。急に起き上がった『ドスジャギィ』に反応できなかつたのだ。そしてその鋭い牙によってミライの脇腹がえぐられた。

### 第三話（後書き）

さすがに0時に投稿は出来ませんでしたorz  
・・・残念。

しかも全然書けてません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6440z/>

---

モンスターハンター～偽者の剣～

2012年1月1日01時00分発行